

# 福岡女子大学・海外体験学習プログラムの実践から

福岡女子大学国際文理学部准教授 和栗 百恵

WAGURI Momoe

## 1. はじめに

今年3月に発表された中教審大学分科会審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」では、大学は「生涯学ぶ習慣や主体的に考える力を持ち、予測困難な時代の中で、どんな状況にも対応できる多様な人材」(p. 3)を育成する必要があるとされ、そのような人材を育成するためにはアクティブ・ラーニングや、授業外学修、体験活動を通じた「質の高い教育」を提供することが必要とされている。その「質の高い教育」実践のためには、事前の準備、授業の受講、事後の展開という一連の学びのプロセスを通じ、学生が主体的に学ぶために大学や教員が工夫を凝らすことが求められている。

この「質の高さ」視点を海外体験プログラムに適用すると、単に「現地に送り出す」以上の仕掛け・デザインをもったプログラム開発・運営が必須となる。海外体験プログラムにおいて、学び続ける習慣や主体的に考える力、不確実性の中でどんな状況にも対応できる力はどのように育むことができるのだろうか。

本稿では、福岡女子大学が新設した国際文理学部における海外体験学習の概要を紹介しつつ、事例としてスリランカで実施したプログラムにおける成果と課題を、上述の人材育成視点から検討する。

## 2. 福岡女子大学国際文理学部における海外体験学習プログラムの位置づけ、実施体制

公立大学である福岡女子大学では、この数年「抜本的な改革」が進行している<sup>1</sup>。その一環として、昨年4月、旧2学部体制から、「国際文理学部」1学部3学科体制へと大きく舵を切るに至った。「次代の女性リーダー育成」のための幅広い教養教育を目指す新カリキュラムでは、「専門知識を深めるだけでなく、社会で自らの人生を切り拓いていく力を身につける」ための国内外での体験学習が柱のひとつとして据えられている。

体験学習は、カリキュラム上では学科を問わず受講できる科目群に位置づけられ、事前学習、現場体験、発展学習と3科目から成る通年の教育プログラムとなっている。それぞれの科目は2単位ずつであり、プログラム修了時には6単位を取得できる。2012年8月現在、8つの国内体験学習プログラム、そして2つの海外体験学習プログラムを展開している。新学部開設の1年半前に体験学習プログラム開発担当として筆者が赴任、プログラム開発にあたり、現在も全てのプログラムを担当している。組織体制としては、教育担当副学長がセンター長を務め学内教職員が兼任で構成する「教育・学習支援センター」が、国内外体験学習プログラム実施にかかわる業務支援を行っている。

### 3. 海外体験学習プログラムの概要

海外体験学習プログラムは、「国際」「環境」「食健康」それぞれを冠した3学科から成る新設学部の土台である「福岡女子大学改革基本計画」<sup>ii</sup>で示された指針、すなわち、「『何を教えるか』よりも、『何を身に付けさせるか』に力点を置き、学問の基本的知識に加え、課題発見・解決力や企画立案能力などのスキル、リーダーシップやチームワークなどの態度・志向性といった学習成果を重視し、学生が自ら学び考える参加型の少人数教育や、社会や異文化との交流を通じて学ぶ体験型学習を幅広く取り入れた教育」(p. 8)に沿って構想した。

具体的には、①「国際開発協力」をテーマとし、スリランカ各地を移動しながら、開発をミクロ(日常生活)～マクロ(政策)レベルまで網羅的にカバーする現場体験(2週間)、②「持続可能な暮らし」をテーマとし、オーストラリアのエコビレッジに滞在しつつ、食やビジネス、コミュニティ等多角的視点からアプローチする現場体験(10日間)、の2つのプログラムを、それぞれ事前学習・発展学習科目と組み合わせ展開している。

ここで特筆しておきたいのは、例えば3、4年次のゼミ活動として「専門分野」の知識を深めるための海外体験とは異なり、大学で学ぶ意味の発見や、自らの生き方の模索、上述の汎用的なスキルや態度・志向性を涵養することを通して「自らの生き方を切り拓く力」を育むことが目的となっている点である。もちろん、テーマに沿った基本的知識は身に付けるものの、受験勉強を頂点とした高校までの受動的・暗記型の学び方を脱却し、能動的で探究型の学び方を試行しつつ体得していくことを大切にしている。

現場体験は、それに向かって事前学習をがんばるための「ニンジン」としても機能するが、同時に、事前学習に真剣に取り組むことでこそ現場体験は効果的になる。また、現場体験によってそれまで学んできたことに息吹が吹き込まれ、息吹が吹き込まれることで、「単に勉強する」を超え、学んでいることが実社会や社会に生きる自分自身の在り様に文脈化される。それを経て、半期の発展学習で「学んで、次にどうするか」を真剣に思考・試行していく。テストや受験のために勉強してきた、大学に入ってから受動的でいることをなかなか脱することができない学生たちにとって、この事前・現場・発展の学びのプロセス自体が、学び方を学び、主体性を培う訓練となっている。

### 4. スリランカプログラム

#### 【事前学習】

2011年度前期に実施したスリランカプログラムは、9月のスリランカの現場体験まで、前期15コマと夏休み中週2回のセッションを事前学習とした。

15コマの授業では、学習到達目標を、①「開発」の変遷について、自分の言葉で語れるようになること、②「開発」に関係する様々なアクターを区別でき、自分の言葉で語れるようになること、③「現場」関連の活動に必要な力<sup>iii</sup>を培い、使えるようになっていること、④この科目に全力で臨み、「履修して力がついた」と自分の成長を感じられること、の4点とし、「国際開発」の変遷をまとめた課題読物<sup>iv</sup>をベースに

したディスカッション、そして、国際開発協力の実務者<sup>v</sup>を迎える3回のセッションの企画運営を通じて学びを深めた。

読物は毎週1チャプター、約60~70ページほどの分量であるが、課題読物を読んで論点をおさえ授業内でディスカッションをするというスタイルに学生たちは苦戦した。

「初めの頃は、大量の英文読物がキツく、読み切れないままどうしていいかわからなかった。しかし、寮<sup>vi</sup>で集まり、リーディングセッションをすることで、メンバーがお互い助け合って少しずつ咀嚼できるようになった」と学生たちがふりかえっている。授業内では小グループに分かれ、模造紙を使用して論点をまとめ、問いを立て、ディスカッションする訓練を行った。

実務者セッションはそれぞれ1コマずつ3名の実務者を招いて実施したが、実務者が来校する直前の週の授業を準備セッションにあてた。ここでは、例えば「日本の政府開発援助」という大きなテーマのもと、授業前に図書館やインターネットを使って情報収集し、問いを立て、授業ではそれを持ち寄って小グループで模造紙にまとめる作業をした。さらには、翌週の実務者セッションに向け、担当グループが自分たちで立てた「問い」をもとにその実務者に向けて行う10分間のプレゼンを作成する他、来校する実務者とのメールのやりとりや調整、交流会の企画を行ってからセッション当日を迎えるようにした。

夏休み中のセッションでは、学生たちが自らの興味関心に従って「開発と女性の労働」「開発と教育」「開発と住民主体性」という3つのグループを形成し、リサーチを進め、毎回のセッションでプレゼンを行った。同時に、しおりの作成や危機管理の考え方、おみやげの段取り等、渡航に際して必要となる作業も並行して行っていた。

## 【現場体験】

2011年9月に実施した17日間の現場体験は、「国際開発協力」をミクロ~マクロの多様な視点から理解するためにデザインした。1カ所滞在型ではなく、スリランカ各地を訪れる移動型のプログラムであり、メインの受入れ先となるのは、スリランカで最大と言われる現地NGO・サルボダヤである。

サルボダヤのネットワークを活かし、村人との協働作業やホームステイを通して、コミュニティレベルでの「開発」の実情に触れた。多民族社会であるスリランカで、多数派であるシンハラ人コミュニティだけではなく、少数派であるタミル人コミュニティも訪問し、多様な現実を学んだ。本学協定校でもあるペラデニヤ大学では、スリランカの農業についてのレクチャーや学生との交流、キャンパス内の実験農場訪問等を行った。一方、急成長する農業ビジネスにおける最大企業CICも訪問、ヒアリングをした。政府大使館訪問や国際協力機構(JICA)でのヒアリング、履修生たちと年齢が近い青年海外協力隊(JOCV)隊員の活動サイト訪問も行った。

17日間は、言葉が通じ勝手を知った福岡で、何でも「当たり前」に生活している学生たちにとって、非常に盛りだくさんな内容だった。そして、「当たり前」故に多くのことに関心を向けない、あるいは携帯電話やTV等から大量の情報が流れてくる中、ひとつひとつを丁寧に拾わない、といった普段の生活習慣・学びの習慣を脱することが困難なようだった。現場体験とは、それを受入れて下さる相手方のご厚意によって初

めて成り立つということ、そのご厚意に対して「学びたい」という姿勢を表現できなければ、つまり、「してもらって当たり前」のような顔をしていたり、質問をしなかったりすれば、失礼極まりないことである、と日々のふりかえり（リフレクション）の時間内でリマインドする必要があった。

それでも学生たちは、物質的には貧しく見える村で、食べ物やトイレ等の習慣の違いに困惑しつつも生活し、恐らく、これまでの人生の中で「他人」（親・家族以外）から見せられたことのないような愛情やおせっかきを受け取り、村人どうしの強い結びつきを体感し、村を去るときには涙を流した。また、出逢い、交流した方々からいただいた言葉の数々―「まずは英語を使えるようになりなさい」（日本国大使）、「100円で預かったものは150円分になるような仕事をする」（国際協力機構スリランカ事務所長）、「人生は試練の連続。試練には強いmindで臨むしかない。恐れずに臨むことで、そのmindはより一層強くなる」（活動を50年以上継続し80歳になった現役のサルボダヤ会長）―は、学生たちを揺さぶり、彼女たちが自身を見つめ直すことを強く促してくれた。

### 【発展学習】

スリランカでの現場体験の後に続く10月からの発展学習（半期15コマ）では、報告会開催・報告書編集と共に、事前学習・現場体験を通じて醸成した課題意識に対して何らかのアクションを企画、実施することを求めているが、その詳細を詰めていくのは学生自身である。15コマを通して獲得したい学習成果や、そのための活動、さらには学習成果を測るための指標等、教員の側面支援を受けながら、18名の学生たちがひとつのチームとして計画を立て、シラバスに落とし込むことから始めた。この作業自体が、再び学びのプロセスとなっている。それは、大抵の場合、学ぶテーマも内容も評価項目も基準も用意されてきた学生たちにとって、学ぶことの意味を問い直し、紡ぎ上げる作業であり、その作業は事前学習と現場体験で培われた学びの姿勢や「文脈化」があるからこそ可能となり、功を奏した。

「学んで終わりではなく、学んだことを還流させよう」という合い言葉のもと、彼女たちが注目したのは初年次全寮制の寮のあり方だった。寮におけるコミュニティ意識が希薄になっていると考えた学生たちは、寮のあり方について寮生たちが話し合う場「ぶっちゃけトーク」の企画運営をした。さらには、大学からの「お達し」だけで一向に実体化していなかった寮内 English Day（英語使用の日）についても、放送やゲームナイト等の企画で臨んだ。大学が何かしてくれるのを待つのではなく、あるいは嘆いて終わるのではなく、自分が今できることを周囲に働きかけながらやってみる姿勢の発露だった。スリランカで、住民主体の開発について学んできたことを、彼女たちは自らがいる場所で活かしたのである。学園祭や体育祭のように「して当然」なものではなく、新しく創り出すものに対しては一様な賛成が得られないこと、様々な困難がつきまとうことも身を以て学んだ。しかしそんな時彼女たちが思い出したのは、前述のサルボダヤ会長の言葉だった。

寮でのアクション以外にも、2時間に渡る報告会の開催、300ページに渡る報告書の作成も行った。同時に、SNSで自分たちの学びのプロセス自体を発信したり、高校生

向けの説明会等で体験学習の広報をしたりと、体験学習プログラムから享受するだけでなく、自らそれを発展、成長させていこうと活動した<sup>vii</sup>。

## 5. おわりに

新学部設立から1年。体験学習プログラムは他科目に比べ「キツイ」という認識が広まり、そこに果敢に挑んでくる学生は多くない。しかし、スリランカプログラムに参加した学生たちは、「キツイのは課題の量ではなく、自分のできなさに向き合うこと」と言う。そして、そんなスランプを経て自らの殻を打ち破って成長できたことこそが収穫であった、とも。

参加学生の中に、1年間の長期留学を始めた2名、そして今夏スリランカでの2カ月のインターンシップに挑戦する1名がいる。残りの15名も、留学への準備をしていたり、地域に根ざした活動を始めたり、と、スリランカプログラムが跳躍台になり、次のステージに歩みを進めている。学び続けたいと主体的に動き、自らの幅を広げるような新しい世界へ足を踏み出し、そこで踏んばる—そのような志向性や力を、1年の学びのプロセスで培ったのだろう。そして、その新しい世界で踏んばることによって、そのような志向性や力はさらに培われていることだろう。

「内向きになった」とされる学生たちが、初めの一步を踏み出せるような間口の広い海外体験プログラムはむろん必要である。まず、とにかく「行ってみる」ことも大切だろう。そして、「キツイ」と聞いて尻込みしている学生たちにどうリーチアウトしていくかは重大な課題である。ただ同時に、自らの可能性をストレッチするような、チャレンジングな仕掛けをもったプログラムがあってこそ伸びる学生たちもいるだろう。

福岡女子大学では、上述の海外体験学習プログラムの他にも、短期語学留学や長期留学、その他様々な海外体験が展開されている。それらを俯瞰し、特徴を整理・把握して連動させることで、4年間を通じた人材育成のより効果的な実践としていきたい。

<sup>i</sup> 福岡県庁HP. (2011). 福岡女子大学の改革について.

<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/e04/fwu-kaikaku.html>

<sup>ii</sup> 福岡県庁HP. (2008). 福岡女子大学改革基本計画（平成20年11月）.

[http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/28/28326\\_12200461\\_misc.pdf](http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/28/28326_12200461_misc.pdf)

<sup>iii</sup> 観る力、聴く力、訊く力、情報収集する力、計画する力、つながる力、ふりかえる力、発信する力、とした。

<sup>iv</sup> McMichael, P. (2007). (4th ed.). Development and social change: A global perspective. Los Angeles: Pine Forge Press.

<sup>v</sup> 国際開発の主要なアクターとして、NGO（JANIC）、国際機関（世界銀行）、政府機関（JICA）から1名ずつ。

<sup>vi</sup> 新設学部では、教育の一環として初年次全寮制を導入している。

<sup>vii</sup> Facebookページ：<https://www.facebook.com/2011fwu.srilanka.program>, 学生たちが作成したビデオクリップ：<http://www.youtube.com/watch?v=HKGL1KcqkNo>